

日本古代

にほんこだいぶんがくし

文学史

高晓华 编著

横山邦治 监修



大连出版社

DALIAN PUBLISHING HOUSE

日本古代文学史

高 晓华 编著



大连出版社

© 高晓华 2004

图书在版编目(CIP)数据

日本古代文学史 / 高晓华编著. —大连:大连出版社, 2004. 6
ISBN 7-80684-282-9

I. 日... II. 高... III. 文学史—日本—古代—高等学校—
教材—日文 IV. I313.092

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2004)第 056285 号

责任编辑:张 波
封面设计:曹 艺
版式设计:唐一民
责任校对:曹秀梅

出 版 者:大连出版社
地址:大连市西岗区长白街 12 号
邮编:116011
电话:0411-83621147
印 刷 者:丹东印刷有限责任公司
发 行 者:各地新华书店

幅面尺寸:140mm×203mm
印 张:9.5
字 数:231 千字

出版时间:2004 年 6 月第 1 版
印刷时间:2006 年 4 月第 2 次印刷
印 数:3001-6000
定 价:18.00 元

序

横山 邦治

七年以前、大連外国語学院日本語学院に赴任して、先ず気づいたことは、日本文学の教科書は、極めて少ないことである。それで日本語教育の需要に応じて、教科書をつくろうと思って孫樹林博士(文学・広島大学)と崔香蘭博士(文学、日本大学)と高曉華修士(文学、広島文教女子大学)と相談したところ、即座に担当まで決まるというような始末で、先ず古典文学、古典文法は崔先生、近現代文学と文学史は孫先生、古代文学史は高先生ということになった。

この近現代文学と古典文学、古典文法のテキストは早くに出版されているが、古代文学史のテキストは難航で、やっとここに出来上がったのである。中国での日本の古代文学史のテキストは、日本の高等学校のテキストをコピーして使用するのが通例で(私自身がそうした経験があるので、中国に適当なテキストのないことは、十二分に承知していることであつた。)、中国の人の手になる日本古代文学史のテキストは、今まであまり見られないのである。

高先生は、自分の目で見た日本の古代文学史を、ご自分のお立場即ち中国人の立場で書き下ろしされたのである。そこにこのテキストの面白みがあり、このテキストが中国の日本語教育の一環として採用されるようになれば、中国の人の目を通して見た日本の古代文学の歴史が、生き生きと語れるようになるに違いないと、私は考えるのである。ここにこのテキストに序して、前途の多幸であることを念ずるのである。

二〇〇四年四月八日

目 次

第一章 上代の文学

〈概 説〉	1
一、上代の叙事文学	5
* 神話・伝説・説話	5
* 記紀と『風土記』	10
二、祭祀の文学	17
* 祝詞	17
* 宣命	19
三、詩 歌	20
* 歌謡	20
* 『万葉集』	24
* 『懷風藻』	34
四、上代文学演習	36

第二章 中古の文学

〈概 説〉	43
一、詩 歌	46
* 漢詩文	46
* 和歌	49
* 歌謡	60
二、物語	63

＊ 作り物語 ^{つく} ……………	64
＊ 歌物語 ^{うた} ……………	70
＊ 『源氏物語』の世界 ^{げんじ} ……………	73
＊ 『源氏物語』以後の物語……………	87
＊ 歴史物語……………	92
三、説話文学……………	96
四、随筆 ^{ずいひつ} ……………	102
＊ 『枕草子 ^{まくらのそうし} 』……………	102
五、日記文学……………	106
＊ 『土佐日記 ^{とさにっき} 』とその他の日記……………	106
六、中古文学演習……………	113

第三章 中世の文学

〈概 説〉……………	119
一、詩 歌……………	124
＊ 和歌……………	124
＊ 連歌 ^{れんが} ……………	137
＊ 歌謡……………	142
＊ 漢詩文……………	142
二、物 語……………	145
＊ 擬古物語 ^{ぎこ} ……………	145
＊ お伽草子 ^{ときぞうし} ……………	146
＊ 軍記物語 ^{ぐんき} ……………	147
＊ 歴史物語・史論書……………	160

三、説 話	163
✳『宇治拾遺物語』とその他の説話	163
四、随 筆	168
✳『方丈記』	168
✳『徒然草』	171
五、法 語	175
六、劇文学	177
✳能	177
✳狂言	181
✳幸若舞	183
七、中世文学演習	184

第四章 近世の文学

〈概 説〉	193
一、詩 歌	198
✳和歌と国学	198
✳狂歌	204
✳俳諧	205
✳芭蕉と蕉風俳諧	210
✳川柳	218
二、小 説	221
✳仮名草子	221
✳井原西鶴と浮世草子	226

＊ ^{よみほん} 読本	234
＊ ^{しゃれほん} 洒落本	240
＊ ^{にんじょうほん} 人情本	241
＊ ^{こっけいほん} 滑稽本	242
＊ ^{くさぞうし} 草双紙	246
＊ ^{ごうかん} 合巻	249
三、劇文学	251
＊ ^{じょうるり} 浄瑠璃	251
＊ ^{かぶき} 歌舞伎	257
四、近世文学演習	262
〈付 録〉	
一、月の異名	269
二、 ^{にじゅうしせつき} 二十四節気	270
三、日本年号索引(五十音順)	271
四、日本古代文学史年表	279
五、日本旧国名都府県対照	294

第一章 上代の文学

〈概 説〉

日本の上代文学は日本文学の発生期からすなわち日本国家生成の当初の大和時代^① から奈良時代^② 末頃までの文学を指している。4世紀頃から平安遷都^③ (794年)までは日本の政治・文学の中心が奈良にあった。この時期の文学は漢字伝来のおかげで、記されて伝えられてきたが、前の文字のない時代の文学は口伝^{くでん}以外になかったため、いままで伝えられてきたものはごく少いのである。こういうわけで、上代文学と言えは奈良時代のものを中心にしていることが多い。上代文学の始めは明確ではないが、終わりは平安遷都までである。

日本では4・5世紀頃から統一が進んで大和朝廷のもとに日本最初の統一国家になった。大化改新^④ と壬申の乱^⑤ を経て、8

① ^{やまと}大和時代 (7世紀から7世紀半ばまで) 日本史の時代区分の一。大和または大和を中心とする畿内地方に朝廷のあった時代。

② ^{なら}奈良時代(710年—784年) 平京城すなわち奈良に都が置かれていた時代。

③ 平安遷都 794年、桓武天皇が都を平安京(京都)に移し、その後約400年の間、日本の政権の中心が平安京すなわち京都にあった。

④ ^{たいかのかいしん}大化改新 645年(大化元年)夏、中大兄皇子(のちの天智天皇)を中心に開始した日本古代政治史上の大改革。それは地方豪族の農民支配権を中央貴族の手におさめるための変革であり、権力の中央集中に適合する体制として唐の律令制がモデルとされた。

⑤ ^{じんしん}壬申の乱 天智天皇死後、その皇位継承にからんで672年(壬申の年)の夏に起った反乱。一か月余の激戦の後、天智天皇の長子大友皇子(弘文天皇)は自殺、天智天皇の弟大海人(天武天皇)は即位した。

世紀初頭になって日本全国を支配する天皇制が確立するに至ったのである。この律令制^① が施行された天皇中心の国家は歴史の流れに順応しているので、活力に満ちて人々に希望を持たせた。奈良朝はこの前代の成果を受け継ぎ、豊かな天平文化^② を生み出したのである。

紀元 82 年頃に成立された中国の漢の時代の『漢書』^③ にははじめて倭^④ の記事が記されたから日本と中国との接触は記録以前からだと思われる。3 世紀頃から 5 世紀にかけて、日本は中国大陆との通行はたびたび行われていた。紀元 607 年、聖徳太子^⑤ の命により小野妹子^⑥ が第一回の遣隋使^⑦ として隋に派遣された。これは遣隋使・遣唐使^⑧ の皮切りとなった。翌年、隋使として、裴世清^⑨ という人が日本に行った。その後、894 年ま

① ^{りつりょうせい} 律令制 律は刑法、令は行政法などに相当する中央集権国家統治のための基本法典。律令制は日本古代 701 年(大宝 1 年)、718 年(養老 2 年)の大宝律令と養老律令に規定された諸制度。

② ^{てんぺいぶん} 天平文化 天平時代(710 年—794 年)を中心とする奈良時代の文化の称。天平文化は盛唐文化の影響が強く、大陸、仏教的な特色を持ち、貴族中心的な文化である。

③ ^{かんじょ} 『漢書』 中国二十四史の一。前漢の歴史を記した紀伝体の書。紀元 82 年頃成立。後漢の班固の撰。班固の死後、その妹班昭が天文志を補う。

④ ^わ 倭 中国・朝鮮で用いられた日本の古称。

⑤ ^{しやうとくだいし} 聖徳太子 (574 年—622 年)用明天皇の皇子。593 年摂政、冠位十二階、憲法十七条を制定、遣隋使を派遣、また仏教の興隆に力を尽した。

⑥ ^{おののいもこ} 小野妹子 (生没年未詳)日本飛鳥時代の官人。607 年、遣隋使として、隋に渡り、翌年帰国。同年、再び隋に赴く。609 年帰国。

⑦ ^{けんずいし} 遣隋使 607 年から 614 年まで日本の大和朝廷から隋へ派遣された使節。

⑧ ^{けんとうし} 遣唐使 630 年から 894 年まで、日本から唐へ派遣された公式使節。

⑨ ^{はいせいせい} 裴世清 中国隋朝の官人。608 年遣隋使小野妹子らの帰国に伴隨して日本に行った。同年帰国。

では遣隋使と遣唐使が約 20 回も派遣された。日本からの留学生・留学僧は中国で貪るように当時の隋・唐の政治や文化などを勉強し、吸収した。しかもその帰朝に際しては唐からいろんな文物・典籍を携えて帰り、つづけて勉強・研究したのである。このようにして、中国大陆から文物・技術・制度などを輸入した。その結果、日本は律令国家を確立し、思想の面では儒教などを取り入れ、文化の面では大陸の仏教や漢字や漢籍などを輸入した。日本に輸入された漢字は日本文学に画期的な影響を与えたのである。

上代文学には、口承文学^① と記載文学^② に分けられる。口承文学は文字のなかった頃口から口へと言い継がれてきたものである。上代文学の中で、口承文学は長い時期にわたって伝わっていたが、しかし記載されなかったのも、後代まで残されるものが少ない。神話・伝説・歌謡・祝詞などは口承文学として口から口へと言い伝えられていたが、これらのものは集団から生まれたもので、個人としての作者がないのである。

7 世紀の初頭の頃になって、中国からの漢字の輸入によって文字で文学を書き記すようになり、文学も口承文学から記載文学に変わり、従来の集団性格を持つ口承文学とは異質的な個人文学意識が生まれてきた。口承文学もこの時期に入って文字で記載するようになり、流動性を失なって凝固されるようになった。

日本文学史で最初の整った本の形になったものはおそらく奈良時代初めの『古事記』『日本書紀』『風土記』であろう。その後、

① ^{こうしょうぶんがく}口承文学 ^{きさい}記載文学の発生以前、口伝でに伝承してきた文学。文字の使用が始まって以後も民間の文学として存続。主として神話・伝説・説話・昔話・民謡あるいは語り物を指している。

② ^{きさい}記載文学 文字による記載された文学。

漢詩文を模倣して作られた漢詩集は『懷風藻』があり、つづいて日本最古の歌集『万葉集』がまとめられた。『古事記』『日本書紀』『風土記』に筆録された日本古代の叙事文学と『万葉集』に代表された上代の抒情文学とは後世の日本文学にはかり知れない大きな影響を与えた。それに上代の祭祀文学である祝詞・宣命も残され、古代の日本文化などを研究する時のよりどころとして重視されている。

一、上代の叙事文学

✳神話・伝説・説話

日本では、律令国家の基礎が確立され、国家の意識が高まるにつれて、文書の記録と歴史の編纂などは必要となった。漢字のおかげでずっと昔からの伝承や記録などが文字化できるようになり、当時まで、口承によって語りつぎ歌いつがれてきた日本古代の神話・伝説・説話・古人の歌謡などはほとんど『古事記』『日本書紀』『風土記』に記載された。

しん お 神 話

古代人たちが、宇宙・人間の起源などが分らなく、自然現象も科学的に認識し、解釈できないため、超自然的な存在があると信じこんで、呪術^① 的・信仰的な想像力によって天地万物の創造と起源や自然現象や社会現象などを神格^② 的はたらきを中心として語り継がれた超現実的な物語は神話である。

日本の神話はほとんど『古事記』『日本書紀』および『風土記』に記載されている。元来、文字がなかったため、神話などを筆録される際に漢字を用いなければならず、漢文体で記載するので、口承時代の神話の表現から逸れたり、欠けたりすることがあるであろう。その上、日本の神話をまとめて記載する『古事記』『日本

① 呪術^{じゅじゆつ} 超自然的な存在や神秘的な力に働きかけて種々の目的を達成しようとする意図的な行為。

② 神格^{しんかく} 神としての資格。

書紀』『風土記』らの本はすべて、朝廷の命により撰進されたので、皇室の權威を維持するため、政治的意図による修正もあろう。だからいま私たちの見られる日本の神話は、もう口承時代のそのものではなく、いろんな原因で、もとの姿をそこなったり、変ったりするところのあるものであろう。

日本の神話は天皇の絶対的權威の確立された時に皇室の地位を固め、皇室の權威を証明する目的で、編集されたので、記紀^①に出てくる神代の物語の中には神々の主なものは、宮廷皇室の祖先であり、国土・人民の祖先である。皇室は天地のはじまった時から尊い位置を持ち続けている。こういうことを一線に引かれているので、自然についての神話がいたって少なく、山川草木や鳥獸虫魚や風雨雷電などにまつわる神話はほとんどない。『日本書紀』の冒頭に出てくる天地開闢の記述などは中国古代の典籍から借用した痕跡が見られる。こういうわけで、日本の神話は、多くの神話が包含されているが、大体天皇家の伝える高天原^②神話を中心に統一され、まれに見られる整った体系を持っている。

日本の神話は大別にすれば、二系統に分けられる。一つは、高天原神話系統で、日本神話の主流とされて、伊邪那岐^③ 伊邪那美^④の国作り神話、死んだ伊邪那美が黄泉^{よみ}の国に住む神話、天

① 記紀 「古事記」と『日本書紀』とを併せた略称。

② 高天原 ^{たかまがはら} 日本神話で、天つ神がいたという天上の国。天照大神が支配。

③ 伊邪那岐 ^{いざなぎ} 日本神話で、天つ神の命を受け、伊邪那美と共に日本の国土や神を生み、山海・草木をつかさどった男神。

④ 伊邪那美 ^{いざなみ} 日本神話で、伊邪那岐の配偶女神。火の神を生んだために死に、夫神と別れて黄泉国に住むようになる。

照大神^①の天岩戸^{あまのいわと}隠れる神話、天孫降臨^②神話、神武東征神話などがこの系統に含まれている。もう一つは出雲神話系統で、八岐大蛇神話^③（因幡の白兔^④や国引き^{くにひ}などの大国主^⑤神話）と日向神話^⑥（木花之佐久夜毘売^⑦の神話、海幸山幸^⑧の神話、豊玉毘売^⑨の神話）である。

- ① 天照大神 ^{あまてらすおおみかみ} 伊邪那岐のむすめ。高天原の主神。皇室の主神。
- ② 天孫降臨 ^{てんそんこうりん} 記紀の神話で、天孫は天照大神の孫、瓊瓊杵尊^{ににぎのみこと}という。天照大神の命によって国土を統治するため、高天原から日向国の高千穂峰に降り、大山祇神^{おおやまつみのかみ}のむすめを娶り3人のむすこを生んだ。
- ③ 八岐大蛇神話 ^{やまたのおろち} 記紀神話で、出雲に八岐大蛇がいて、頭尾はおのおの八つに分れる。素戔嗚尊^{すさのおのみこと}がこれを退治したという神話。
- ④ 因幡の白兔 ^{いなば しろうさぎ} 出雲神話の一。因幡国に渡るため、兔が海を上にと並んだ。鰐鰼の背を敷き渡るが、最後に鰐鰼に皮を剥ぎとられる。八十神^{やそがみ}の教えに従って潮に浴したたにかえって苦しんでいるところを大国主神に教われるという話。
- ⑤ 大国主 ^{おおくにぬし} 日本神話で出雲国の主神。
- ⑥ 日向神話 ^{ひむか} 「日向」日本の旧国名の一、ほぼ宮崎県にあたる。「日向神話」はこのあたり古代から伝わる神話である。
- ⑦ 木花之佐久夜毘売 ^{このはなのさくやびめ} 日本神話で、大山祇神^{おおやまつみのかみ}のむすめ。
- ⑧ 海幸山幸 ^{うみさちやまさち} 日本神話で魚とりをよくする神である海幸彦が山幸彦の頼みによって釣針を貸す。ところが山幸彦は釣針をなくしてしまうのである。返却をせまられるが、返すことはできない。そこで自分の剣でたくさんの釣針をつくって弁償したが、海幸は受けとらない。山幸彦は海の宮へ釣針を探しにでかけ、海神の娘と結ばれる。3年ののちに帰国するが、そのおり海神から贈られた潮の干満を自由にできる呪力の珠をもって、ついに海幸彦を服属させるという話。
- ⑨ 豊玉毘売 ^{とよたまびめ} 海神の娘で、彦火火出見尊^{ひこほほでみのみこと}の妃。彦屋の屋根を葺き終らないうちに産気づき、八尋鯉^{やひろわに}の姿になっているのを夫神にのぞき見られ、恥じ怒って海へ去ったと伝える。

伝説

伝説は口承文芸の分類の一つで、神話に比べて現実性が強く、世俗的・歴史的であり、英雄やものごとの起源に関する話が多く、古くから人々がその内容を事実と信じて、語り伝えられるものである。

古くから奈良時代までの伝説はやはり記紀や『風土記』に筆録された。『古事記』の中巻・下巻や『日本書紀』の神武紀以後には伝説が多く載せられ、両書とも天皇の命によって撰進されたから、伝説の主人公も天皇一族の人が普通である。とくに神武天皇や倭建命^①をめぐる伝説が有名である。『風土記』にも伝説の類が多く残される。代表的な伝説は『出雲風土記』の国引き伝説^②、『播磨風土記』の三輪山伝説^③、『丹後風土記』の浦島伝説^④、

① ^{やまとたけるのみこと}倭建命 日本古代伝説上の英雄。

② ^{くにひ}国引き伝説 ^{やつかみずおみつののみこと}出雲の神、八束水臣津野命 ^{しらぎ}が対岸の新羅の地などに網をうちかけて「^{くにこ}国来、国来」と言って、引き寄せてきた地を出雲国に結びつけたという伝説。

③ ^{みねやま}三輪山伝説 神婚伝説のうち、神仙を男性とする伝説。貴公子が夜ごとに姫のところに通っている。そのうち、姫が身ごもったので、その両親はその貴公子の素姓を確かめるため、姫に男の衣の裾に糸をつけた針を刺させる。翌朝、衣服につけた糸をたどっていくと三輪山に至り、貴公子が三輪山の神であったと知るといふ伝説である。

④ ^{うらしま}浦島伝説 丹後国の浦島の子という漁師が亀に連れられて、海中に行った。竜宮で乙姫に歓待され、3年の月日を栄華の中に過ごした。別れの時、乙姫から玉手箱をもらって故郷に帰ったが、乙姫の戒を破って玉手箱を開けると、白煙がたちのぼり、浦島の子がたちまち老人になったという伝説。人間の男が仙境に赴き、そこに留まって女と結ばれるがまた現実世界に帰るという話型の代表である。

丹後国比治山の羽衣伝説^① などがある。三輪山伝説・浦島太郎伝説・羽衣伝説などは後世の文学に長く影響した。

説話

民間に伝わる話で、モチーフによって起源説話・神婚説話などに分類する。内容によって昔話^②・伝説・世間話^③などに分けられ、広くは神話を含めることもある。説話の主人公は、神や歴史上の人物とは限らず、動植物や普通の人物であることが多い。内容は現実的なものもあれば、超現実的なものもある。また、神話や伝説と違って断片的なものが多い。日本上代の説話は記紀に見られるほか、『風土記』に多く記載されている。『風土記』は地誌なので、その中の説話も土地を中心として展開され、とくに地名説話が多く記載されていた。これらの説話は当時の庶民の生活感情と生活意識を物語り、事件の叙述の中に当時の集団の精神などが投影されている。

あとの平安時代の822年(弦仁13年)頃成立された『日本^{にほんりょう}霊^い異記』は最初の筆録になる日本口承文学の説話集で、雄略天皇^④

- ① ^{はごろも}羽衣伝説 天女が地上で水浴中、羽衣を男に隠されて、天に帰れずやむなく人妻となるが、暮しているうちに羽衣を取り返して天に昇るという伝説である。この異郷世界の女が人間の男と結婚するが、のちに女は異郷世界へ帰るという話は白鳥処女伝説とも言う、中国・朝鮮などにも分布している。
- ② ^{むかしはなし}昔話 口承文学の一。空想的な世界を内容とし、冒頭が「むかしむかし」などの文句をもって始まるのが特徴。花咲爺・桃太郎・舌切雀などの類。民間説話ともいう。
- ③ 世間話 世間の出事などについての話。
- ④ ^{ゆうりてく}雄略天皇 記紀に記された日本5世紀後半の天皇。